

手をつなぐ

2022
4月
[No.794]

特集 「協働」でふみだす新しい一歩



今月の問題 強制不妊手術に関する訴訟の現在地とこれから
ひびき 巻 誠一郎 (元プロサッカー選手)

新連載 ひとりぼっちじゃないよ みんなとおなじくできないよ 湯浅正太

わたしたちも言いたい 仕事と趣味 常木大輔 2

毎日すったもんだ [第64回] 大好きな帽子 5

特集 力をあわせて魅力アップ 「協働」でふみだす新しい一歩⁷

価値のエール交換を 里見喜久夫 8

すべてが肯定される社会への実践 松田崇弥 10

各地で進む、「協働」のかたち 12

人と人をつなぐチョコレート 瀬古昌弘 12

表現を通じて社会に新しいクリエイティブを創出 樋口龍二 14

お互いの価値を見つけ、交換する 武田和恵 16

地域の仲間たちと一緒に 錦織卓也 18

魚の養殖を通して育まれた地域との共生 志賀竜二 19

ブランド立ち上げに外部コーディネーターの協力 仲藤里美 21

企業との出会いから新しい展開へ 青山俊子 24

あたりまえのデモクラシー 猪瀬浩平 26

ちいきのいいもの 第28回

ワイン いわきワイナリー 29

今月の問題

強制不妊手術に関する訴訟の現在地とこれから 30

ひびき

子どもたちの夢を育める環境をつくりたい 巻 誠一郎 34

新連載 すっきり伝わる相手目線のメール・SNS

そのメールの向こうに誰かがいる 羽山慎亮 37

くらしを支える福祉の制度 第19回

知的障害のある人が「通う」場 その3 38

ニュースのじかん 41

あなたの街の育成会

コロナ禍での「もうひとつの成人式」 福島県福島市・木曾明美 42

中央の動き

第二期成年後見制度利用促進基本計画の方向性が示されました 44

枝元なほみのしあわせごはん いち、にっ、さん! [lesson72]

春の香りを楽しむサンドイッチ

表紙絵作者のプロフィール

■葉谷裕美（わらがや・ひろみ） 42歳 ■福島県須賀川市 社会福祉法人福音会 障害者支援施設 宇津峰十字の里

■タイトル おともだちのかお③ ■ひとこと 友達が上手とほめてくれました。選ばれてとてもうれしいです。

仕事と趣味

新潟県

常木大輔

僕は、NPO法人新発田市手をつなぐ育成会ハローハローで障害のある子供の放課後デイサービスの指導員として仕事をしています。子供達が帰ってくる間に、おもちゃの消毒などの仕事をして、子供達が帰ってきたら一緒に活動をしたりしています。これからもハローハローで仕事を頑張っていきたいと思っています。

趣味は、電車で旅行に行くことです。

2017年4月に初めてひとりで栃木県日光市にある日光東照宮に行きました。

9月に島根県出雲市にある出雲大社や

2018年3月に熊本県熊本市にあるくまモンスクエアに行ったり、

JR熊本駅に行つて、クルーズトレインななつ星を見たり、

スマホで写真を撮ったりしていました。

あと、2019年2月に京都に行つて

鉄道博物館や清水寺、金閣寺、八坂神社、東寺、京都タワー、

JR京都駅でドクターイエローの新幹線と、

トワイライトエクスプレス瑞風の電車を見ました。うれしかったです。

つぎ
次に、10月に香川県仲多度郡琴平町にある金刀比羅宮と、
えひめけんまつやまし
愛媛県松山市にある坊っちゃん列車にのって道後温泉に行ってきました。
ふうろはきもちよかったです。

また、2021年11月に鳥取県米子市にあるJR米子駅で
ねんがつ とつとりけんよなごし
ゲゲゲの鬼太郎の目玉おやじの電車がホームに入線してきたので写真を撮りました。
でんしや
コロナが収束したら電車に乗って旅行に行きたいです。
りようこう
乗ってみたい路線は岩手県にある三陸鉄道とJRの山田線と釜石線です。
ろせん いわてけん
でんしや
電車に乗ったり写真を撮りたいです。
でんしや



「わたしたちも言いたい」ではみなさまからの^{たよ}お便りを^{ぼしゅう}募集しています（宛先は48ページ）。
^{せいかつ}生活のこと、^{しごと}仕事のこと、^く暮らしのことなど^{かん}ふだん感じていることを書いて^かお送りください。

力をあわせて魅力アップ

コラボ

「協働」 でふみだす 新しい一歩

障害福祉とそのほかの業界が、分野を越えて協力しあうことが増えています。

農水産業やものづくり、伝統工芸やデザイン・アートなど、
生産者や企業が福祉事業所と新しい製品づくりに取り組んだり、

地域の課題に向きあったり、

さまざまな分野で「協働」が進んでいます。

その背景には、なにがあるのでしょうか？

なにかと不安や心配が晴れない中で迎えた新年度ですが、
これまでとは違った展開や躍動を見せる福祉内外の「協働」は、
なにやらおもしろそうです。



価値のエール交換を

「コトノネ」編集長
里見喜久夫

季刊「コトノネ」を発行して、10年が過ぎました。10年はいいい区切りなのか、いくつかの媒体の取材を受けました。決まって聞かれるのは、「この10年で、障害者福祉に大きな変化はありましたか」です。わたしも、必ず返す答えは、「障害者が、地域で暮らしたり、働く場に出てきた」ことです。

障害者から学んだ多様性

取材をスタートした2011年頃、障害者福祉施設が運営するカフェで、建築家が手掛けた建物を探すのは結構大変でした。でも、それから、あつという間に、建築家がデザインした洒落たカフェが普通になりました。障害者の仕事も、裏方だけでなく、ホールに出て接客に広がりました。客層も、家族や関係者が中心だったのが、まったく縁のない人も立ち寄るようになりました。コミュニケーション

ンがズレることに、いら立つよりも、たのしめるセンスの人も出てきました。健常者が、自分のマナーを押し付けるより、障害者のふるまいを多様な文化として受け止められるように成長したのです。

それは、障害者が多様性の宝庫であることの発見です。その突破口となったのは、障害者アートだったと、わたしは思っています。アートは、多くの人がたのしみ、関心の高い世界です。そして、アートは、いつも未来を見つめています。

その未来の世界に、障害者が手掛けたものもろものものが、新しいアートとして迎え入れられました。もう、障害者は、わたしを理解してほしい、支援して、と要求するだけの弱者ではありません。アールブリュットの名のもとに、価値を共有する仲間になったのです。

アートと言っても、絵画・彫刻・音楽などだけではありません。さまざまな人

「俺たちの米だぞ」と誇る。その言葉そのままにだいて、「俺たちの米だぞ」 コメセットが生まれました。



の多様な価値観そのものの、日常そのものをアートして表現する手法も生まれてきました。たとえば、岡山県NUCAの活動「なんでそんなプロジェクト」にご注目を。

認める、そして懐に飛び込む

農福連携の活動も、季刊「コトノネ」創刊のころに生まれました。わたしも、